

# 私の『ピートルの空の下』日誌（抜粋）

足立 英逸  
あだち えいいつ

この十月、ロシア版新幹線「サブサン（はやぶさ）号」にて、ピートルを訪れました。ロシアの国民詩人プーシキンの「青銅の騎士」の中の

私は愛する

ピートルの創れるものよ

私は愛する

おまえの均整のすがたを

力に充ちたネヴァの流を

その岸の御影石を

おまえの柵の鑄鉄の唐草を

（中略）

ピートルのまちよ

うつくしくあれ

ゆるぎなく立て

ロシアのように

古都モスクワのアジア的な野暮ったい街並みとは違って、若い時から再三出張で訪ねたレニングラードから名を変えた街ペテルブルクは変わらず、ヨーロッパの香り漂うとても美しい水の都・運河の街「北のヴェネツィア」でした。

その昔、矛盾した精神世界の解明へ読者をいざなう『罪と罰』に登場するラスコーリニコフのアパートや金貸し老婆の住む家、ソーニャのアパートへと続くS横丁、K橋を仕事の合間に歩いた当時に思いをはせながら、プーシキンがその生涯の大半を過ごした街の、文豪ドストエフスキーが『貧しき人々』で作家デビュール後『罪と罰』『カラマーゾフの兄弟』などの五大傑作長編小説を執筆、その生涯を終えた街の、プーシキンのリツェイ学習

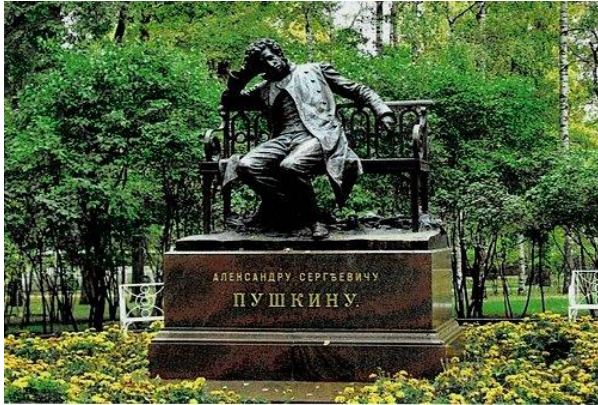
院の町や決闘の地チヨールナヤ・レーチカ、ネクラソフ博物館、アンナ・アフマトヴァ博物館、『鼻』『外套』などゴーゴリの小説の舞台にもなった目抜き通りネフスキー大通りなどなどの散策が目当てでした。多くの出会いもあり、楽しく充実した一時でした。

懐かしの皆さん、見聞したいこと、やりたいこと、時間がいくらあっても足りませんが、またしばらく国内で旧ソ連の在日児童諸氏のサポートに専念する予定です。

それではまた。

●編集部より

ピートルとは、サンクトペテルブルクの俗称です。



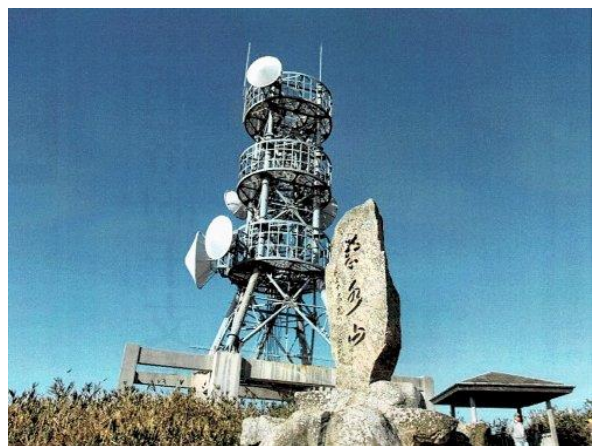
●リツェイ\*のアレクサンドル S.プーシキン  
 \*帝政ロシアの貴族子弟が学んだ学習院。プーシキンは第一期生。ペテルブルグ市の中心部から南へ25キロほどのところのツァールスコエ・セロー\*\*（今はプーシキン区と呼ばれる）にあった。開設された年から数えると今年には205年にあたる。  
 \*\*かつてロシア皇帝の夏の離宮「皇帝の村」を意味するツァールスコエ・セローは、エカテリーナ宮殿など多くの宮殿、あずまや、橋、大理石像のほか、エキゾチックな建造物などそのすべてが息を呑む美しさだ。



●青銅の騎士  
 ペテルブルグ市内ネヴァ川沿いの元老院広場（旧デカブリスト広場）に立つピョートル大帝騎馬像。この都市を創設したピョートル大帝の偉業を称えこの騎馬像を題材にした A.S.プーシキン作長編叙事詩『青銅の騎士』からこの名で呼ばれるように。広々とした緑の芝生が開放感あり、今はとても優雅な憩いの広場となっている。



●菊水山山頂の展望所より見下ろす神戸市街西のはずれと明石海峡大橋  
 甘い水色の空気に包まれた淡路島へつなぐ瀬戸内の海にかかる明石海峡大橋、所どころ色づきはじめた六甲山系西側を望む。



●標高 459m 菊水山。山頂に立つ記念石碑\*と電波塔  
 \* “楠公六百年祭記念、昭和十年五月、神戸市小学校職員児童”と石碑裏側に記。昭和 10 年、楠正成没後 600 年の記念に神戸市が楠正成の家紋『菊水』の形にして松を植樹したのが名前の由来という。小さな山ながら、いくつかあるどの登山口を選ぼうと標高差のある六甲山系の一つに入るこの山頂までは、小生の住む裏六甲の神戸鈴蘭台より遠足でおよそ 40 分と比較的身近なところに位置する。